

小児事故防止のための保健指導

(分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

梅田勝¹⁾、清水美登里^{1) 2)}、天野多真²⁾、大江美智代²⁾、
竜田富代美²⁾、尾崎則子²⁾、柏木真弓美²⁾、永井邦子²⁾、
橋本勉²⁾

要約：和歌山県御坊保健所管内において、健診の機会を利用した乳幼児の事故防止のための個別の保健指導を試みた。また、この指導を受けた保護者に対して、後日、指導効果の有無をみるためのアンケート調査を行った。

その結果、この保健指導は保護者の事故に対する意識を向上させ、有用なものであるとの支持を得た。しかし、保護者の予防についての意識と事故の発生頻度は必ずしも一致していなかった。

今後は、子どもの発達段階や事故の発生頻度を考慮した保健指導の方法をさらに検討してゆく必要があると考える。

見出し語：保健指導、事故防止、保健所

〔研究目的〕：和歌山県御坊保健所管内（管内人口 7.8万人）において、乳幼児健診の機会を利用した乳幼児の事故防止のための個別の保健指導を試み、その有用性についての検討を行った。

〔対象と方法〕：対象：G市（人口 2.9万人）に居住する6か月児、および1歳6か月児の保護者

調査時期：平成2年11月1日～平成3年2月28日

調査方法：①乳幼児健診（6か月児、1歳6か月児）前に各保護者の事故予防意識を調べるた

め、アンケート用紙を郵送し、記入してもらった。健診時、このアンケート用紙を回収して保健婦が記入漏れの有無を確認後、回答内容に応じ個別に保健指導を行った（図1）。アンケートの質問項目は6か月児用、1歳6か月児用どちらも、フラミンガム調査¹⁾を基に修正を加え、6か月児41項目、1歳6か月児41項目とした。回答形式は「はい」「ときどき」「いいえ」の三者択一とした。対象者 220人中、回答の得られた調査総数は 195人（男 103人、女92人）であり、回収率は88.6%であった（表1）。

②この意識調査が、保健指導の教材として適切かどうかを知る目的で、各保護者に①の事故予防意識調査を答えるのに労した負担の程度を、アンケート方式でたずねた。そして、①の意識調査用紙と一緒に郵送して、健診時、①の用紙とともに回収した。この質問事項は、(1)回答するのに要した時間、(2)回答を求めた質問項目量、(3)質問内容の適切性、(4)回答しづら

- 1)和歌山県保健環境部
(Public Health and Environment Dept. of
Wakayama Prefecture)
2)和歌山県御坊保健所
(Gobou Public Health Center of Wakayama
Prefecture)

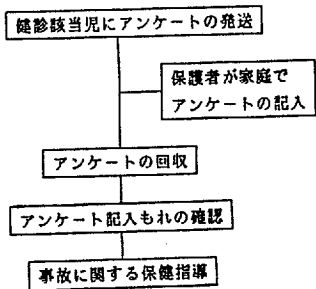


表1. 各アンケート回収者の内訳(人)

区 分	総数	男	女	6か月健診			1歳6か月健診		
				総数	男	女	総数	男	女
子どもの事故予防に関する意識調査	195	103	92	80	46	34	115	57	58
事故予防意識調査の教材としての有用性を問うたアンケート	185	-	-	75	-	-	110	-	-
事故予防に関する保健指導の有効性を問うたアンケート	147	75	72	65	36	29	82	39	43

図1 事故防止のための保健指導フローチャート

表2. 子どもの事故予防に関する保護者(6か月)の意識状況(人)

項目	番号	質問事項	総数 (%)	はい (%)	ときどき (%)	いいえ (%)	その他 (%)
基 本	1	目を離す時、ベッド欄を使用する	80 (100.0)	52 (65.0)	3 (3.8)	5 (6.3)	20 (24.9)
	2	監視不可能時に安全な場所へ移す	80 (100.0)	61 (80.0)	6 (7.5)	7 (8.6)	3 (3.8)
	3	子供だけで留守番させない	80 (100.0)	66 (82.5)	11 (13.8)	3 (3.8)	0
転 落	1	テーブル・ベッド等に放置しない	80 (100.0)	54 (67.5)	18 (22.5)	8 (10.0)	0
	2	階段・段差に安全対策がしてある	80 (100.0)	33 (41.3)	2 (2.5)	44 (55.0)	1 (1.3)
	3	歩行時はいつも注意する	80 (100.0)	30 (37.5)	2 (2.5)	4 (5.0)	44 (55.0)
	4	歩行器を使用しない	80 (100.0)	38 (47.5)	9 (11.3)	30 (37.5)	3 (3.8)
	5	バラタダ等へ一人放置しない	80 (100.0)	76 (95.0)	0	2 (2.5)	2 (2.5)
	6	いすに一人放置しない	80 (100.0)	61 (76.3)	12 (15.0)	2 (2.5)	5 (6.3)
誤 飲	1	薬等を身近に置かない	80 (100.0)	63 (78.8)	6 (7.5)	11 (13.8)	0
	2	ビーズ・硬貨等で遊ばせない	80 (100.0)	70 (87.5)	6 (7.5)	3 (3.8)	1 (1.3)
	3	食事中そばで注意する	80 (100.0)	77 (96.3)	1 (1.3)	0	2 (2.5)
窒 息	1	ビーナッツ等を食べさせない	80 (100.0)	78 (97.5)	0	1 (1.3)	1 (1.3)
	2	ビニール袋等を身近に放置しない	80 (100.0)	58 (72.5)	13 (16.3)	8 (10.0)	1 (1.3)
	3	睡眠中も注意する	80 (100.0)	66 (82.5)	14 (17.5)	0	0
	4	ラップ・紙袋等を身近に放置しない	80 (100.0)	60 (75.0)	15 (18.8)	4 (5.0)	1 (1.3)
	5	アメ・あられを食べさせない	80 (100.0)	75 (93.8)	2 (2.5)	1 (1.3)	2 (2.5)
火 傷 ・ 火 災	1	熱湯を取り扱う時に注意する	80 (100.0)	79 (98.8)	0	1 (1.3)	0
	2	ストーブ等への接触を注意する	80 (100.0)	80 (100.0)	0	0	0
	3	熱湯入り容器は端に置かない	80 (100.0)	71 (88.8)	4 (5.0)	5 (6.3)	0
	4	ポット・鍋への接触を注意する	80 (100.0)	76 (95.0)	4 (5.0)	0	0
	5	ストーブを使用しない	80 (100.0)	42 (52.5)	5 (6.3)	33 (41.3)	0
	6	ストーブの安全柵を使用する	80 (100.0)	17 (21.3)	2 (2.5)	42 (52.5)	19 (23.8)
	7	消火器を常備している	80 (100.0)	40 (50.0)	0	38 (47.5)	2 (2.5)
	8	寝タバコはしない	80 (100.0)	62 (77.5)	10 (12.5)	8 (10.0)	0
	9	火災時の避難計画がある	80 (100.0)	24 (30.0)	—	56 (70.0)	0
打 撲	1	壁の額等の落下防止対策がある	80 (100.0)	51 (63.8)	16 (20.0)*	11 (13.8)	2 (2.5)
	2	机等の角に安全対策がしてある	80 (100.0)	7 (8.8)	11 (13.8)*	62 (77.5)	0
溺 水	1	浴室へ鍵等侵入防止対策がある	80 (100.0)	36 (45.0)	1 (1.3)	43 (53.8)	0
	2	浴槽へ水を貯めない	80 (100.0)	56 (70.0)	13 (16.3)	11 (13.8)	0
	3	浴室で遊ばせない	80 (100.0)	78 (97.5)	2 (2.5)	0	0
	4	浴槽等そばに一人では遊ばせない	80 (100.0)	79 (98.8)	0	1 (1.3)	0
	5	洗濯機に水を貯めない	80 (100.0)	39 (48.8)	18 (22.5)	23 (28.8)	0
交 通 事 故	1	車ではベビーチェアを使用する	80 (100.0)	45 (56.3)	0	34 (42.5)	1 (1.3)
	2	車では後部座席に乗せる	80 (100.0)	26 (32.5)	11 (13.8)	39 (48.8)	4 (5.0)
	3	車に一人残さない	80 (100.0)	64 (80.0)	4 (5.0)	0	2 (2.5)
	4	自転車の刈草機はしない	80 (100.0)	60 (75.0)	3 (3.8)	10 (12.5)	7 (8.8)

(*一部)

かった質問内容の有無、の4項目とした。対象者 220人中、回答の得られた調査総数は 185人であり、回収率は84.1%であった。(表1)。

③健診時行った子どもの事故防止の保健指導が保護者の意識の向上に果たした効果をみるため、後日、①の実施者に往復ハガキによるアンケートを行った。この質問事項は、(1)保健指導を受けた後の事故に対する注意の有無、(2)保健指導後の事故やヒヤットとしたことの有無、(3)事故予防についての保健指導の必要性、(4)保健指導で使用したパンフレットの有用性、の4項目とした。対象者は健診時に保健指導を受け

た 195人中調査総数は 147人であり、回収率は 75.4%であった(表1)。

〔結果〕:

1)子どもの事故予防に関する保護者の意識状況について

6か月児の保護者80人について、事故予防意識をみると、意識の低かった事項は、「階段や段差のある所に子どもが落ちないように対策をしている」が33人(41.3%)、さらに「机やテーブルの角を安全に保護している」は7人(8.8%)と低率であった。

一方、事故予防意識の高かった事項では、

表3. 子どもの事故予防に関する保護者(1歳6か月)の意識状況(人)

項目	番号	質問事項	総数 (%)	はい (%)	ときどき (%)	いいえ (%)	その他 (%)
基	1	病院受診事故の経験はない	115 (100.0)	91 (79.1)	-----	24 (20.9)	0
	2	事故やヒヤットとした経験はない	115 (100.0)	45 (39.1)	-----	70 (60.9)	0
	3	子供一人だけで留守番させない	115 (100.0)	99 (86.1)	14 (12.2)	2 (1.7)	0
	4	周囲の安全確認をしている	115 (100.0)	102 (88.7)	13 (11.3)	0	0
	5	訪問先での安全確認をしている	115 (100.0)	94 (73.0)	24 (20.9)	7 (6.1)	0
転落	1	階段・段差に安全対策がしてある	115 (100.0)	28 (24.3)	31 (27.0)*	56 (48.7)	0
	2	ベランダへ踏台を放置しない	115 (100.0)	107 (93.0)	-----	4 (3.5)	4 (3.5)
	3	窓に柵等の安全対策がある	115 (100.0)	92 (80.0)	0	9 (7.8)	14 (12.2)
誤飲	1	危険物を保管・管理している	115 (100.0)	84 (73.0)	18 (15.7)	13 (11.3)	0
	2	ビーズ・硬貨等で遊ばせない	115 (100.0)	43 (37.4)	55 (47.8)	17 (14.8)	0
	3	古い薬は処分している	115 (100.0)	108 (93.9)	6 (5.2)	1 (0.9)	0
	4	誤飲時の処置方法を熟知している	115 (100.0)	26 (22.6)	81 (70.4)**	7 (6.1)	1 (0.9)
窒息	1	ビーナッツ等を食べさせない	115 (100.0)	58 (50.4)	43 (37.4)	12 (10.4)	2 (1.7)
	2	ビニール袋等を身近に放置しない	115 (100.0)	24 (20.0)	49 (42.6)	41 (36.6)	1 (0.9)
火災	1	ストーブ等、接触に注意している	115 (100.0)	112 (97.4)	3 (2.6)	0	0
	2	熱湯の人った容器を端に置かない	115 (100.0)	92 (80.0)	18 (15.7)	5 (4.3)	0
	3	テーブルクロスは使用しない	115 (100.0)	92 (80.0)	0	23 (20.0)	0
	4	ストーブの安全柵を使用する	115 (100.0)	49 (42.6)	3 (2.6)	38 (33.0)	25 (21.7)
	5	マッチ・ライター等放置しない	115 (100.0)	82 (71.3)	14 (12.2)	19 (16.5)	0
	6	消火器を常備している	115 (100.0)	59 (51.3)	-----	54 (47.0)	2 (1.7)
	7	火災時の避難計画がある	115 (100.0)	45 (39.1)	-----	69 (60.0)	1 (0.9)
打撲	1	壁の額等の落下防止の対策がある	115 (100.0)	89 (77.4)	8 (7.0)*	15 (13.0)	3 (2.6)
	2	机等の角に安全対策がしてある	115 (100.0)	22 (19.1)	6 (5.2)*	87 (75.7)	0
溺水	1	浴室に鍵等、侵入防止対策がある	115 (100.0)	49 (42.6)	3 (2.6)	63 (54.8)	0
	2	浴室で遊ばせない	115 (100.0)	106 (92.2)	3 (2.6)	6 (5.2)	0
	3	入浴後、浴槽へ水を貯めない	115 (100.0)	62 (53.9)	14 (12.2)	39 (33.9)	0
	4	水遊びの際は大人が監視する	115 (100.0)	112 (97.4)	1 (0.9)	2 (1.7)	0
	5	洗濯機に水を貯めない	115 (100.0)	66 (57.4)	12 (10.4)	37 (32.2)	0
交通事故	1	車では後部座席に乗せる	115 (100.0)	41 (35.7)	25 (21.7)	49 (42.6)	0
	2	運転前にドアロックをする	115 (100.0)	104 (90.4)	9 (7.8)	2 (1.7)	0
	3	車ではベビーチェアを使用する	115 (100.0)	59 (51.3)	7 (6.1)	49 (42.6)	0
	4	車に一人残さない	115 (100.0)	94 (81.7)	17 (14.8)	4 (3.5)	0
	5	自転車の相乗りはしない	115 (100.0)	45 (39.1)	25 (21.8)	45 (39.1)	0
	6	三輪車等の安全教育をしている	115 (100.0)	27 (23.5)	9 (7.8)**	78 (67.8)	1 (0.9)
	7	交通安全教育をしている	115 (100.0)	48 (41.7)	30 (26.1)**	37 (32.2)	0
遊び	1	危険な遊びに注意している	115 (100.0)	78 (67.8)	7 (6.1)	28 (24.3)	2 (1.7)
	2	おもちゃの安全点検をする	115 (100.0)	73 (63.5)	33 (28.7)	9 (7.8)	0

(* 一部 ・ ** 少し)

「熱湯などを取り扱う時には、子どもに用心している」(98.8%)、「水の入った浴槽やバケツの近くに子どもを一人だけにしておかない」(98.8%)、「ピーナッツなどの小さな豆類を食べさせない」(97.5%)、「子どもをお風呂場で遊ばせない」(97.5%)、「食事中は近くで気をつけている」(96.3%)、「ベランダ、縁側や玄関に子どもを一人にしておかない」(95.0%)、「ポットや鍋などを子どもの手の届かない所においている」(95.0%)、「アメやあられなどの固い食物を食べさせない」(93.8%)であり、これらは全て90%以上と高率であった。

1歳6か月児の保護者 115人について検討してみると、意識の低かった事項は、「子どもをビーズや硬貨などの小さなもので遊ばせない」は43人(37.4%)、「自動車では後部座席に子どもを座らせる」は41人(35.7%)、「階段や段差のある所には子どもが落ちないように対策がし

てある」は28人(24.3%)、「ビニール袋や風船などを子どもの手の届く所に置くことがない」は24人(20.0%)、「机やテーブルの角を安全に保護している」は22人(19.1%)であった。また、「誤飲の処置」に対して「知っている」は26人(22.6%)、「少し知っている」は81人(70.4%)であった。

逆に意識の高かった事項には、「ストーブ、アイロン、ポット、鍋などやけどの原因となるものに気をつけている」(97.4%)、「おとなの監視なしで子供を川や池、プールなどで遊ばせない」(97.4%)、「古い薬や家庭用化学薬品の空になったビンはず必ず捨てる」(93.9%)、「二階などのベランダに踏み台となるようなものを放置しない」(93.0%)、「子どもをお風呂場で遊ばせることはない」(92.2%)、「運転する前にドアをロックする」(90.4%)であり、これらは全て90%以上であった。(表2・表3)

表4. 保護者が事故予防意識調査を回答するのに費やした負担の状況(人)

表4-1 回答に要した時間

区分	総数 (%)	回 答 時 間 (分)				
		0-4(X)	5-9(X)	10-14(X)	15- (X)	不明(X)
6ヶ月児	87(100.0)	23 (26.4)	29 (33.3)	15 (17.2)	6 (6.9)	14 (16.1)
1歳6ヶ月児	133(100.0)	26 (19.5)	61 (45.9)	16 (12.0)	6 (4.5)	24 (18.0)

表4-2 質問項目の量

区分	総数(%)	多い(%)	ふつう(%)	少ない(%)	不明(%)
6ヶ月児	87(100.0)	4 (4.6)	67 (77.0)	3 (3.4)	13 (14.9)
1歳6ヶ月児	133(100.0)	7 (5.3)	99 (74.4)	4 (3.0)	23 (17.3)

表4-3 回答しやすかったか否か

区分	総数(%)	はい(%)	ふつう(%)	いいえ(%)	不明(%)
6ヶ月児	87(100.0)	46 (52.9)	20 (23.0)	8 (9.2)	13 (14.9)
1歳6ヶ月児	133(100.0)	65 (48.9)	39 (29.3)	6 (4.5)	23 (17.3)

表4-4 回答しづらかった質問の有無

区分	総数(%)	有(%)	無(%)	不明(%)
6ヶ月児	87(100.0)	24 (27.6)	49 (56.3)	14 (16.1)
1歳6ヶ月児	133(100.0)	23 (17.3)	81 (60.9)	29 (33.3)

※:「基本」1・2,「転落」3・4・5・6,「窒息」1・2・4・5,「火傷」6,「溺水」1・2・3・5
「交通事故」1・2・3・4
※:「基本」2・3・5,「転落」1・2,「誤飲」1・2・4,「窒息」1・2,「火傷」4・6,「打撲」1・2
「溺水」1・2,「交通事故」2・4・5・6,「危険な遊び」1・2

2) 事故予防意識調査の保健指導教材としての有用性について

1)の保護者の意識調査が、子どもの事故防止に関する保健指導の教材として使用するのに適切かどうかをみるために、回答者の負担の程度をたずねた。保護者が意識調査の回答に要した時間は、「5～9分」が最も多く、6か月児の保護者で75人中29人(33.3%)、1歳6か月児の保護者で110人中61人(45.9%)であった。意識調査の質問事項の量は「ふつう」と回答した人は6か月児の保護者の67人(77.0%)、1歳6か月児の保護者では99人(74.4%)と最も多かった。また、「回答しやすかった」と答えた人は6か月児の保護者で46人(52.9%)、また1歳6か月児の保護者では65人(48.9%)であった。回答しづらい質問は「なかった」と回答した人が6か月児の保護者で49人(56.3%)、1歳6か月児の保護者で81人(60.9%)であり、「回答しづらかった」との指摘のあった質問項目も少なくはなかった(表4)。

3) 事故予防に関する保健指導の有効性について

1)の意識調査アンケートに回答し、事故予防の個別保健指導を受けた保護者195人中、「事故に注意するようになった」と回答した人は、6か月児の保護者で56人(70.0%)、1歳6か月児の保護者で68人(59.1%)であり、保健指導の有効性を物語っていると思われた。「健診時に子どもの事故予防の話は必要」と回答した人は6か月児の保護者で64人(80.0%)、1歳6か月児の保護者で79人(68.7%)であった。また、「使用したパンフレットが参考になった」と回答した人は、6か月児の保護者で64人(80.0%)、1歳6か月児の保護者で81人(70.4%)と高率であり、保健指導とともに使用したパンフレットは比較的有效性の高いものと思われた(表5)。

〔考察〕:

今回実施した保護者の小児事故予防に関する意識調査では、注意の行き届いた事項がみられる反面、保護者の安全への配慮が不十分な対策事項がみられた。まず、6か月児と1歳6か月児の両方にみられた事項で、半数以上に安全対策ができていないのは、転落防止の「段差対策」

、打撲防止の「机の角の保護」、溺水防止の「浴室の注意」である。さらに、1歳6か月児の場合、窒息防止や誤飲防止のそれぞれ「小さい物への注意」、「誤飲の際の処置法」は「ときどき」も含めると半数以上で出来ていないことが確認できた。誤飲防止の対策は完全な実施が望まれ、保護者に特に重点的な指導の必要性を示している。

さて、子どもの事故については昨年度、外傷(転落・転倒を含む)が最も多く、ついで火傷であることを報告した²⁾。この結果より外傷対策が最も重要な施策の一つと考えた。今回の意識調査においても、転落防止の「段差対策」と打撲防止の「机の角の安全保護」は保護者の予防意識が低いものの一つと示された。この二つの結果より、今後、外傷に対する予防意識を高めることに力を入れていかなければならないと考える。

しかし、一方で昨年度の報告と今回の結果で食い違いもみられた。それは、昨年度の報告においては、火傷の原因はポットによるものが半数以上であったが、今回の調査によると保護者の「ポットや鍋への接触防止」に関する意識は高いことが示された。このことから保護者が注意していても完全な事故予防に結びつかず、事故が発生してしまうものもあると推察された。

次に、意識調査の回答に用いた時間や項目の量は、どちらも回答者の負担の程度は許容範囲内であると思われ、調査内容数については同等かもしくはこれ以下であれば保護者が回答するのにそれほど負担とならずにすむであろうと考える。

しかし、回答がしやすかったか否かについては、6か月児の保護者で27.6%、1歳6か月児の保護者で17.3%が「回答しづらかった」と指摘しており、個々の質問内容について、今後検討を要する点が少なくないことを知り得た。それらの反省点を整理してみると、次の3つに類別ができると思われる。

① 健診年齢にそぐわないもの

例えば、6か月児の転落3「つたい歩き、一人歩きをしている時はいつもそばにいて気を付けますか?」は、まだ歩行時期に達していない

表5. 子どもの事故予防に関する保健指導が保護者に与える効果の状況（人）

番号	質問事項	区分	総数(%)	はい(%)	いいえ(%)
1	子ども事故防止についての保健指導を受けた後、以前よりも事故に注意するようになったか否か	6ヶ月児	65 (100.0)	56 (86.2)	9 (13.8)
		1歳6ヶ月児	82 (100.0)	68 (82.9)	14 (17.1)
2	保健指導を受けた後、子どもの事故経験かヒヤッとした経験の有無	6ヶ月児	65 (100.0)	14 (21.5)	51 (78.5)
		1歳6ヶ月児	82 (100.0)	19 (23.2)	65 (76.8)
3	健診時、子どもの事故予防についての話が必要か否か	6ヶ月児	65 (100.0)	64 (98.5)	1 (1.5)
		1歳6ヶ月児	82 (100.0)	79 (96.3)	3 (3.7)
4	保健指導の際、使用したパンフレットが参考になったか否か	6ヶ月児	65 (100.0)	64 (98.5)	1 (1.5)
		1歳6ヶ月児	82 (100.0)	81 (98.8)	1 (1.2)

6か月児では回答不能になってしまう。この項目で「その他」が過半数(55.0%)を占めたのは、このためと思われる。また、6か月児の窒息1「ピーナッツなどの小さな豆類を食べさせますか？」や窒息5「アメやあれなどの固い食物を食べさせますか？」は6か月ではまだ離乳食の初期で豆類やアメ等の固い食物を親が子に与えることはまずない。したがって、同様の理由で「食べさせない」のか、または純粹に事故予防のために「食べさせない」のか区別がつかない。1歳6か月児の交通事故6「三輪車や自転車の安全な乗り方を教えましたか？」も、普通このような乗り物に乗るには健診月例からすると早いため、乗り方を「教えていない」親が多い(67.8%)と思われる。

②生活習慣の相違に由来するもの

例えば、6か月児の基本1「子どもから目を離す時は、ベビーベッドの柵をいつもしていますか？」はベッドを使用しない家庭は回答できない（「その他」は24.9%）。また、6か月児の火傷6・1歳6か月児の火傷4「ストーブのまわりに安全柵がありますか？」は暖房器具として必ずしもストーブを使用するとは限らず、その場合回答は「いいえ」か「その他」のどちらかを選ぶ（6か月児：「いいえ」と「その他」を併せて76.3%、1歳6か月児：同様に76.7%）と思われる。6か月児や1歳6か月児の溺水1「お風呂場に鍵をかけるなど子どもを一人で入れないようにしていますか？」は当地域において浴室へ外から鍵をかける習慣がみられな

いので「鍵」の部分にとらわれると、回答がしにくくなると思われる。

③表現が不適切なため明解でないもの

例えば、6か月児・1歳6か月児のどちらも打撲1「壁に掛けてある額などが落ちないようにしてありますか？」は「額」のない家庭では具体的に他にどういうことに気をつければいいのか、はっきりしない。また、6か月児・1歳6か月児共交通事故の項目では、「車」や「自転車」のない家庭は質問に答えられないことになる。

以上のような点に留意し、保護者にわかりやすく、教育的効果を合わせもった質問内容とするには設問内容にまだまだ工夫がいるものと思われた。

最後に、事故防止についての保健指導が保護者に及ぼす指導効果であるが、多くの保護者が指導前よりも事故に注意するようになったと回答しており、保護者の事故予防意識が高まり、保健指導の効果を確認できたと思われる。一方、保護者側からも、この保健指導は195人中143人(73%)が「必要である」と回答しており、その意義を認めているものと考えられた。また、保健指導の際使用したパンフレットも比較的有效性が高かったと思われた。

今回実施した事故予防についての保健指導は、保護者に支持が得られるとともに、指導効果も認められた。この反面、保健指導の方法については再検討を要すものと思われる。とりわけ、事故予防意識調査の質問内容は、子どもの発達

段階に合ったものとなるよう考え直し、その上で精選していく必要がある。また、保護者の子どもの事故予防の意識が低い事項のみならず、意識が高くとも事故発生の頻度が少ない事項を中心に、さらに効果的な保健指導方法を検討する必要があると考える。

〔まとめ〕：

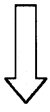
今回、御坊保健所管内において乳幼児健診時に、子どもの事故防止のための保健指導を試みた。この保健指導は、保護者からは効果的であるとの支持が得られた。しかしながら、指導方法については、いくつかの見直すべき点があると思われた。まず、保健指導内容については、事故予防意識の低い事項だけでなく、予防意識は高いにもかかわらず事故の発生をみた事項に対して、今後重点的に指導すべきであろうと考えられた。また、子どもの事故は発達段階に応じて様相が異なるため、この点に留意した教材の選択と適時性のある活用を考えていく必要があると考えられた。来年度は、第一に事故予防についての指導内容が事故の実態に即したものになるよう検討すること、第二にこの保健指導の客観的に評価の出来るような調査を企画し、実施してゆきたいと考えている。子どもの事故防止に直結するような、効率的かつ有効な保健指導の方策を今後も検討していくつもりである。

〔文献〕：

1) American Academy of Pediatrics: "Guideline for health supervision" and "The injury prevention program", 1985.

伊藤助雄・因 京子・伊藤雄平（共訳）：小児の健康管理読本，日本小児医事出版社，1986。

2) 梅田 勝ら：乳幼児の事故の実態調査について。平成元年度厚生省心身障害研究「地域・家庭環境の小児に対する影響等に関する研究」報告書（主任研究者：高野 陽），P. 161-164，1990。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:和歌山県御坊保健所管内において、健診の機会を利用した乳幼児の事故防止のための個別の保健指導を試みた。また、この指導を受けた保護者に対して、後日、指導効果の有無をみるためのアンケート調査を行った。

その結果、この保健指導は保護者の事故に対する意識を向上させ、有用なものであるとの支持を得た。しかし、保護者の予防についての意識と事故の発生頻度は必ずしも一致していなかった。

今後は、子どもの発達段階や事故の発生頻度を考慮した保健指導の方法をさらに検討してゆく必要があると考える。